

## 人生の肯定

## 仏教は厭世主義か

仏教を聞きかじりますと、仏教は悲観主義、厭世主義で、活発な人生生活を厭うて、無気力な、あきらめ主義又は、安っぽい卑屈な善人の養成、或は不合理な社会は権力にも無頓着なお人良し製造の教のようにとられます。確かにお老人ばかり集まって陰気臭い本堂での悲しそうな、あきらめの空気は、嫌がるものに違いありません。だがそれが果たして真の仏教でありましょうか。釈尊の真意であり、大乘仏教の真面目でありましょうか。私どもは容赦なく、そんなものではないと申します。

特に親鸞聖人の世界は決してそうでないことを言いきります。殊に教行信証の中に盛られた、大信の世界には、はちきれぬような力とよろこびの、溢れていることを認めます。

人生の肯定！！ それはあまりに仏教より遠い言葉のように見えて、これほど仏教をはっきり把握した言葉はありません。

なぜそれならば仏教が悲観的、厭世主義の教と見えるかということですが、これには理由があります。そもそも釈尊が、仏陀となられます前、釈尊は人生の無常に泣き、矛盾に苦しみ、厭世のために、王城も父王も後も愛児も棄てて出家せられました。確かにそれは徹底的な悲観厭世から生まれ出たものであります。然しかくして出家された釈尊は遂に釈迦牟尼仏として更生せられました。仏陀釈迦は決して悲観厭世の人ではなくて、道の体得者であり、智慧と慈悲の円成せる救世主であります。人生の大肯定者でありました。仏教が悲観的に見えて、しかも永遠にシヨウペンハウエルの悲観哲学と異なる所以は其処であります。仏陀としての釈尊の上には、暗黒はありません。ない所か、如何なる禍、不幸、生死動乱もかき消すことの出来ない光の把持者、灯明台であり、病める者の大医王であり、弱き者の父であり、道のための真の力の生活者でありました。誠に深い意味での人生の大肯定者でありました。即ち暗黒より光明へが仏教であります。

## 安価なる人生肯定

昨日まで暗い顔をしていた者が、今日百円ほど入るともう明るい人生の肯定者になる。やれ人が悪く云った、やれ病氣した、やれ何と、肯定したり、否定したり、ぐらぐらして暮らしていると、七面鳥どころか、全く生きるということは唯、人生の波に弄ばれていることになります。

過去の聖者たちは、一樣に一度、深刻に人生の深い暗につきあたって、凡そ知るべきことを知りつくされました。否定さるべきものを否定しつくし、一切のものを清算しつくして、しかもその最後において、天地の相、真理に徹底して、一切の畏怖おそれを去り、迷妄を却け、無明を亡ぼして、智慧光に更生して人生の大肯定に達せられました。然るに凡人は、泣くべきことも真に泣かず、苦しむべきことも真に苦しまず、徹底的

に求道もせず、一切の事について諦（あきら）かみきわめもせず、其の時の風まかせで、いい加減（あさはか）な浅墓（あさはか）な人間の肯定の上に立っているもので、一寸したことでもすぐぐらついで、泣かねばならないのであります。其処に人生を肯定したとも否定したともつかない、気まぐれな生存がつづけられてゆくのであります。

## 生活と教

然しそうした不徹底の生活では満足が出来ません。どうしても「破壊（は）えせざること金剛の如（ごと）き生活者になりたいものであります。人生の大肯定者になりたいものであります。

如何にしてそれに至り得るのでありましょうか。親鸞聖人の言葉をもつてすれば「信」を獲るより外にはありません。信を獲るのに如何にしたらいのでしようか。それに対しての答は、「聞（き）く」ということであります。真実の教を聞くことであります。私は「其の生活を通して、教を聞け。」と申しましょう。

生活と教、教が生きてるのは生活であります。なされてゆくのは生活であります。生活を問題にせずして教を頭の中に入れてたのでは単なる觀念の遊戯となり、全く教を受けない生活は、無価値な生存でしかありません。

## 頭の中か生活か

生活でもつて教を聞く時、間違われた生活が発見され正されてゆきます。教育は、人を文化人として解放します。正しい考え方や生活がはじまって来る時、教を教として体認することが出来ます。或る地方では、石碑に月が掘つてあるのを月の霊として祭り、これに金を供えると幸運がむいて来ると信じ、又そのお金を借りて来て商売するとよく儲かる、返す時には二倍にして返さないと罰があたるとしています。その月の石碑を見た時、かかる信心のおこることはその人にとって正しいとされることでもあります。そしてかかる生活者は、他の日常生活においてこれに類似した低級な生活相をとっております。問題は月の霊を信ずることによつて代表されるその一切の生活の野蛮、低級さであります。しかもかかる人を、真実の教以外に導くものはありません。けれどもこの人にとつては、直ちに我等が人間最高の教として信ずる仏教の真髓をもつて行つても駄目であります。教によつて生活自体が高まらない以上、教そのものも信じられません。しかも教によらねば生活は転入して来ませぬ。ここに教の上にも方便の教が出来る所以であります。

若しここに長年、仏教について聞いて、一見聖人と同じような信念に住したように見える人があつても、それが更に月の霊を信じていたとするならば、彼はまだ真実には教そのものも聞かなかつたのであります。何と現在までに、かかる唯、觀念のみの仏教の多かつたことでしょう。即ち頭が仏教、本願でかためられて、その生活は何でもない。かかる人には、真実の仏教は生きていないのであります。私が本格的な生活を強調する所以であります。

## 聖浄二教の止揚

親鸞聖人は人生の大肯定者であります、それは間違つた人生活の大否定に即してなされた、大肯定であります。この全否定を通さない肯定は、浅墓な夢におわつてしまいます。多くの人は聖人の人生の大否定の一面のみを見て、大肯定の一面を見ませぬ。念仏によつて見出された真実生活の大肯定が、無明による迷いの生活の大否定ともなつたのであります。聖人は唯人生の否定のみによつて悲観的虚無的な、懷疑的な世界に永遠に泣いたお方ではなくて、如来の本願に更生し、真に生くべき世界として大地を肯定されました。

一体単なる肯定は無意味であり、単なる否定も気まぐれであります。真の生活は大否定をはらむ大肯定であります。仏教の根本思想にわけ入れれば、厭うべきなく、悲しむべきなく、棄つべきなく、取るべきなく、与うべきなく、天地本来、唯物ならぬはなしと云つた具合に大肯定すべきが、仏教の真面目であります。この大肯定を直ちに持つて来て、娑婆が即ち浄土だ、この身がそのまま仏だとやるのが聖道門しょうどうもんであります。然るにあまりにも、大地の現実の痛ましい闘争の相に直面し、かつ自己内観における凡夫意識の結果はここにかかる肯定を悲痛に裏切ります。やがて、極端なる現在否定の理想主義の浄土教が生まれて来た所以であります。思いを唯西方浄土にかけ、現実には嫌な所、住むべからざる所、現実には唯、極楽に入る準備場所にすぎぬと、ここに人生の逃避、悲観的厭世的な浄土教が生まれて来ました。

聖人はここに出現して、この聖道門と浄土教とを、どちらもとり、一方の現実主義、一方の理想主義、それを止揚して、ここに真宗を發揮したのであります。これ聖人独特の信境であり生活であります。即ち、現実には決して無価値なものではなくして、如来本願の輝くべき、正定聚不退転の菩薩の生くべき世界であり、蘭林遊戯地らんりんゆうげじとして、やがて光を背に還り来る菩薩の普賢の行願に生くべき天地でありました。

聖人は生活基調としての、純粹文化の根源、彼岸の浄土を肯定しつつ（理想、浄土教的）現実にとるべきなく、棄つべきなく、求むべきなく、厭うべきなき大肯定（聖道門的）に生きられたのであります。

これが聖人が人生の大肯定者であつたという所以であります。

## 聖人の世界

然し聖人の人生の肯定は、

1. 人生は人間の単なる享樂的本能の百パーセントの満足場としての肯定ではなかつた。
2. 従つて自己清算のない者、勝手に己的無道義者にとつて肯かれる世界ではない。
3. 従つて、今少し待て、五年か十年、乃至は幾百年待っていたら、地上は楽園になるぞ。それまでの辛抱だ。我等はその「願望への喜悦」に生くべきだ。そしてその欲楽を地上に建築することが「莊嚴浄土の喜悦」であるなどの出鱈目でたらめな希望によつて今日を肯定されていたのではない。
4. 人生には永久に、苦もあれば楽もあり、悲しみも愉快もあり、幸福者もいれば、不幸者もある。「生死の苦海ほとりなし。」である。この永劫輪廻よせうりゅうんねの諦観たいかんの唯中に於ける、新しい人生の大肯定であつた。

5. 生きることの喜びは、遂に大地永遠の生死動乱によつては消えることのない境地、即ち衆禍むさわざの波なくしては、本願の大船なく、道そのものなし、衆禍はそのまま、本質的生活のためのよき縁であり、本格的な生活者にとつて、衆禍こそ転じて、生甲斐を感じずる喜びとなるという大肯定……………。